演習授業における社会連携を意識した アクティブラーニング

大原　良通

１．教育改革計画の概要

本報告は，「2014 年度神戸学院大学教育改革助成金」の助成を受けておこなわれた「演習授業における社会連携を意識したアクティブラーニング」に関するものである。「学士課程教育の質的向上」をうたい「教育方法の工夫改善を中心とした教育活動を奨励」するものである。助成の対象期間は 2014 年８月１日から 2015 年３月 31 日までで，募集時の「取組参考例」として，「・学士課程教育に関する取組，研究・教育手法の開発，取組，研究に関するもの―実験的授業，授業教授法改善，指導法等」などが挙げられている。

申請の理由は，2011 年度よりおこなっている大原ゼミと白鶴美術館との協働授業をより充実させるためである。

このワークショップの特徴を理解するために，人文学部人文学科におけるいわゆるゼミと呼ばれる演習授業の位置づけについて説明する。人文学科は２年次後期，第四セメスターから卒業研究完成までの二年半をおなじゼミに籍を置く。本助成に参加する学生は，人文学科の歴史文化専攻演習大原ゼミに所属する２年次生と３年次生である。４年次生は卒業研究制作があるので，参加するかどうかは本人の意思に任せた。歴史文化専攻演習は日本史，東洋史，西洋史を専門分野に掲げる教員がそれぞれ担当しており，大原ゼミは東洋史に興味を持つ学生が選択することになる。

演習授業では，おもに論文執筆のための基礎知識，技術の習得と学生各自の研究題目設定とそれに対する資料の収集，さらに研究成果の発表が中心となる。東洋史に興味を持つ学生が中心であるから，卒業研究は中国を中心とした東アジアに関するものが大半を占める。そこで，卒業研究制作に必要な技術として漢文の習得があり，２年次後期から，漢文読解の訓練を課している。

しかしながら，社会が大学に求める教育として，社会で役立つ知識の習得が求められ，教室から学外に出て，社会とかかわる授業を望むような社会風潮が感じられるようになった。そこで，中国を中心とした東アジア史を専攻する学生たちが，学外でそれらに関することを学ぶ場を考えた結果，東アジア史に関するものを所蔵している美術館や博物館で，何らかの学習活動をすることがふさわしいように思われた。もちろんそれには，博物館，美術館が数多く存在する神戸に大学があるという立地条件が整っているからである。それら数ある博物館，美術館のなかで白鶴美術館が協働相手となった経緯については，紙面の

神戸学院大学人文学部

都合もあるので，割愛するが，青銅器から絵画や絨毯，また西アジアから日本のものまで，時代的にも地域的にも幅広いコレクションを持つ白鶴美術館でワークショップをおこなえるようになった事は，幸運だといえるだろう。

ワークショップ自体は2011年からおこなっているが，本報告は「2014年度　神戸学院大学教育改革助成」の報告であるので，2014年８月１日から2015年３月31日におこなったワークショップを中心に述べてゆく[1]。

２．ワークショップ実施報告

ここでは，海原氏の報告を中心としてワークショップ実施概要[2]について記述する。

2-1　テーマ

2014年度は以下の二つのテーマを掲げてワークショップをおこなった。

１.「クルクルまわして糸づくり・彩り鳥どりパイル織」

２.「リバーシブル?!　作ってわかる屏風の裏技」

１．については，2014年春季展示においておこなわれたワークショップ「花鳥をいろどる～じゅうたん配色デザイナー～」の参加者から募集した鳥と花のぬりえを基にデザインされた図面に従って，小さな絨毯を来館者や指導員が織るというもので，2015年秋季展示最終日（12月６日）完成（予定）の花鳥柄の絨毯である。〈写真１　２〉

〈写真1〉2013年秋季展
ワークショップ風景
「彩り鳥どりパイル織」
（「花と鳥の絨毯」作成）

〈写真２〉2014年春季展
ワークショップ「クルクルまわして糸作り・彩り鳥どりパイル織」にて作成中の絨毯「花と鳥の絨毯」（裏より）
2014年６月（春季展示終了後撮影）

〈写真３〉2013年春季展
ワークショップ風景
「かがやく鳥っくあーと」
（小さな屏風形カード作り）

２．については，同じく平成2013年春季展より「四季花鳥図屏風」を鑑賞するためのワークショップ〈写真３〉をおこないはじめ，翌年春季展からは屏風の構造そのものを知ることを目的としたワークショップとして構成しなおしたもので，屏風の構造の要ともいえる「紙蝶番」に焦点をあてた「屏風づくり」とした。

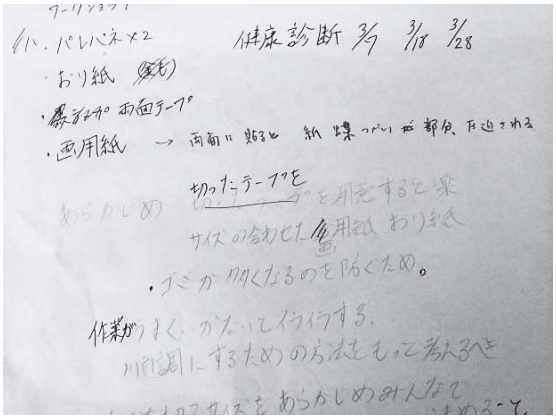
2-2　準備

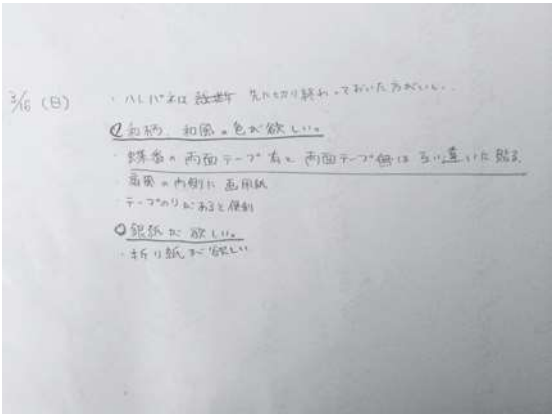
2014年度のワークショップ計画として，〈別表１〉のような基本方針をたてた。これま

での問題点として，ワークショップ期間中２回の参加で美術館活動の特徴・展示品・ワークショップ内容をすべて把握することは難しいという点が明らかになっており，より計画的な指導員養成が必要と思われた。そこで３月中を準備期間とし，参加する日程に応じて指導員それぞれが個々に担当の「マニュアル作り」に関わり，その役割を意識してワークショップに取り組んでもらおうと考えたものである。つまり３月中に参加した学生にはワークショップ用の屏風と試作と「マニュアル作り」のための作成ポイント，また試作中および完成作品に対する要望を募ることとした。〈写真４，５〉

・なんのために行うのか。＝展示作品をより深く理解し、興味をもって鑑賞することを目的とする	
・何を目指すのか。＞よりよいワークショップをつくる：そのために各担当のマニュアル作りをしながら実践、独自ワークショップの実施	
ワークショップのマニュアルづくり	
1. 指導マニュアル	（ワークショップ指導員として、ワークショップに合わせたマニュアル作り）
2. 接客マニュアル	（美術館に相応しい接客を考える）
3. ワークショップ準備マニュアル	（ワークショップを進めるために準備の手順
4. ワークショップ報告（学生レポート）	
ワークショップを考える	
・3月中に1回美術館で作品解説を受講する	
・3～4月中に取り上げる作品と目的、方法をまとめる	
基本ワークショップ（美術館側が企画しているワークショップ）	
・彩とりどりパイル織＞二人一組で織り進める（3～6月）	
・リバーシブル？！～つくってわかる屏風の裏技～	
3月参加一日目の課題	
・作品を知る（解説を受ける）＞独自ワークショップを考える	
・織の作業を進める1段ごとに交代	
・基本ワークショップの内容を理解する	
・準備マニュアルと指導マニュアルを作る（箇条書き＞並べ替え）	
・準備作業を行う	

〈別表１〉「ワークショップ指導計画」2014 年３月１日表作成



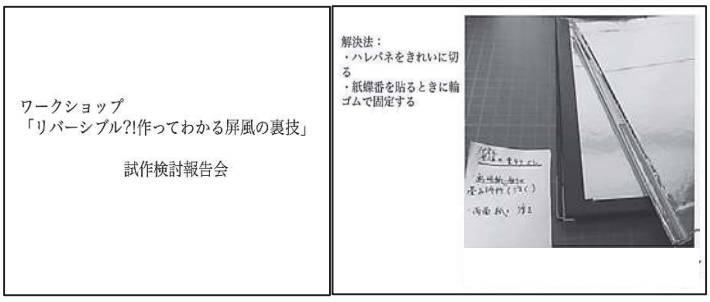


〈写真４，５〉学生による「ポイントメモ」2014 年３月

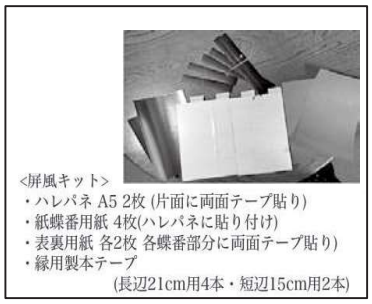
また，「ワークショップ指導計画」（〈別表１〉）に基づき，５月中に大原ゼミ主催のワークショップを開催することにした。これは指導員自身の作品に対する興味や，指導員としてのモチベーションを促進すると思われたためである。そこで３月中の参加者に具体的なワークショップ案と準備計画のための展示解説をおこなった。

2014 年度に入り，４月 16 日にはワークショップ経験のある大原ゼミ３年次生の授業時間に目的と準備の全体講習をおこなった。事前講習の内容は, 先のワークショップ項目１.「クルクルまわして糸づくり･彩り鳥どりパイル織」については, 大原ゼミ独自で「糸づくり」の活動がなされていること,「織」については，織機運搬が事実上不可能なこと，パイル織については，経験者の指導によって現場においても比較的短時間で技術の伝授がおこなわれていること，などの理由から，項目２.「リバーシブル ?!　作ってわかる屏風の裏技」の指導また「屏風キット」作成指導に絞った。

なお, この「事前講習」では「ワークショップ指導計画」と「試作検討報告会」〈写真６〉として３月中に学生から提示された作成ポイントや要望を選択してまとめたものを提示した。それをもとに表具師のアドバイスを受けた結果，より完成度の高いワークショップ用「屏風作成キット」ができ, また「屏風作成マニュアル」〈写真７〉も整った。講習後は「屏風作成マニュアル」に基づき，学生による「屏風キット」準備に取り掛かった。２年次生のワークショップ準備指導（「屏風キット」作成）については，３年次生が２年次生を指導し実践するというかたちをとった。



＜写真６＞
４月 16 日「試作検討報告会」（４月７日作成）



＜写真７＞
「屏風作成マニュアル」より
（４月７日作成）

2-3　秋季展展示（2014 年９月 13 日～ 12 月７日の日曜）中におけるワークショップ

秋季展では，会期中のすべての日曜にワークショップをおこなった。理由は下記の二点である。

・翌秋，新館開館 20 周年展示中の完成を目指して，絨毯織りのスピードアップをはかるため。

・10 月４, ５日に行われる「ひょうごミュージアムフェア」に必要な「屏風キット」200 個（９月当初計画時）の製作のため。

なお，ワークショップの内容はすべて同じとしたが,「屏風キット」において，本体となるパネルを片面糊の B1 パネル使用から，両面糊の A3 パネルを使うこととした。これにより両面テープを貼る手間を大幅に軽減し，またパネルサイズの誤差をより少なくすることに繋がった。

2-4 「ひょうごミュージアムフェア」概要と参加状況

「ひょうごミュージアムフェア」は, 子どもたちのための兵庫県内博物館施設が行うワー

クショップ大会である。兵庫県立歴史博物館および兵庫博物館協会を中心とした「ひょうごミュージアムフェア実行委員会」が主催し文化庁の補助金を受けた事業となっている。2014 年度は 10 月４日（土），５日（日）の２日間，神戸駅南側，神戸ハーバーランド「スペースシアター」でおこなわれた。

当館が秋季期間中に「ひょうごミュージアムフェア」の参加を決定した理由は下記の通りである。

1．当館ワークショップが子どもから大人まで楽しむことのできるワークショップとして紹介できるものになっていること。
2．美術館ワークショップを外部イベントに出すことで，美術館でのワークショップ活動の周知をはかることができる。
3．子どもを対象としたイベントであり，かつ多数の来場者が見込まれるため，指導員にとっては活動しがいのある場となると思われた。
4．「ひょうごミュージアムフェア」と大学からの補助金により必要な材料を購入することができた

2-5 「ひょうごミュージアムフェア」での活動内容

同フェアでは，「クルクルまわして糸づくり」・「リバーシブル ?!　作ってわかる屏風の裏技」・「彩り鳥どりパイル織」のうち，「彩り鳥どりパイル織」は大きな織り機を一台でおこなっており，２日目の日曜日には美術館内のワークショップに使用することから，フェアでの開催は見送ることとした。

また，主に「リバーシブル ?!　作ってわかる屏風の裏技」をワークショップの中心とし，屏風づくりには時間がかかることから，待ち時間や当館ワークショップブースの紹介および気軽な参加を促すための手段として「クルクルまわして糸づくり」（スピンドルによる羊毛製糸）をおこなった。〈写真９〉

〈写真９〉2014 年「ひょうごミュージアムフェア」（10 月４日撮影）

同フェア２日間の総来場者数は約 2200 人，ワークショップ開催館 28 館の平均参加者数は 248 人，当館でのワークショップ参加者は 124 人（屏風作製のみ）であったが，これは来場者の好みが反映したものではなく，ワークショップ内容（展示物に触れる体験から細かな手作業による作品づくりまで）によって所要時間に大きな差があることが主な原因である。

同フェアにおいて大原ゼミ生は，当館ブースに於いて参加者の勧誘・受付，指導員，また裏方として「屏風キット」作製をおこなうスタッフに分かれて連携し，柔軟に活動した。

またブース背面パネルを使って子ども用当館紹介スライドと同時に，大原ゼミ生が作成した参加者向けの「屏風作製マニュアルビデオ」<写真 10 >を映写した。ブース前を通る人びとの目をひく宣伝ともなった。

〈写真 10〉参加者向け屏風製作マニュアルビデオ (22 min.) 大原ゼミ生作成
「リバーシブル ?!　作ってわかる屏風の裏技」「ひょうごミュージアムフェア」にて上映

このように，「ひょうごミュージアムフェア」では当館と大原ゼミ生が培ってきたワークショップ活動の力を発揮できる場となったといえる。

2-6　次期ワークショップに向けて　～「表具」に関する指導員講習～

2015 年 2 月 9 日に大阪歴史博物館講義室にて，表具師岡本吉隆氏（大阪，株式会社清華堂社長）による表具の仕事と日本文化に関する講義が行われた。

岡本氏には屏風作製ワークショップについての材料・製作方法など，さまざまなアドバイスを頂いてきた。学生も自分たちが製作してきた「屏風」について深く知る機会であり，あまり知られていない「表具師」という職業，あるいは周りから消えつつある日本文化について熟考する契機になったと思われる。

3．成果

白鶴美術館でのワークショップ実施は本助成を受ける以前よりおこなっており，その中で，美術館と大学の一ゼミとの協働作業の障害要素は見えていた。たとえば，ワークショップの準備のために，ゼミの時間を割かなければならず，史料の講読や発表に多少なりとも支障をきたすことになる。クラブ活動やアルバイトなど，学生の都合により，美術館に行く学生の人数に偏りがでることがある，など，いくつかの問題点が見えていた。

それら問題点の中で，本助成によって取り除くことができたのは，ワークショップにかかる経費である。上述した海原氏の報告にもあるように，材料費を助成してもらうことによって，大きなイベントに参加することができた。また，家から美術館までの学生の交通費を助成してもらったことも，ワークショップを気兼ねなくおこなえる大きな要素となった。収支報告書でも報告したが，材料費に 16 万 8 千円，学生の交通費に 17 万 2 千円かかっている。これは見方を変えると，今回の助成がなければ，通常，美術館側に年間 30 万円

を越す負担を課しており，学生側からすると，半期で平均５千円ほどの負担，それが，一年では一万円ほどの負担になっているということである。

相方，大きな負担を抱えながらも，このワークショップが続けられたのも，その負担に見合うだけの，成果があったからである。ただ，この助成は 2014 年後期のみで打ち切られることになり，館や学生には従来のように，大きな負担が強いられることになった。2014 年に助成があっただけに，学生の間では助成によって交通費がまかなわれたことのある学生と，そうでない学生のあいだで不公平感がうまれ，また，助成を受けた学生も，本年度はその助成が受けられない不満が見受けられる。反対に助成が継続的におこなわれない場合の問題点も浮き彫りになった。

学生に対する教育効果については，本来この助成申請する段階で期待していた効果として，普段自分が学んでいる東アジアの歴史とかかわりのある美術品を身近に感じることができたことである。その成果は，2015 年度に卒業研究を制作する学生の中で，白鶴美術館の展示品から影響を受けた論題を提出した学生が数名いる。もちろんこれは，白鶴美術館でワークショップをおこなうようになってから，毎年見られる効果である。

ワークショップでは，学生が積極的になり，ゼミでの協力的雰囲気や学年を超えた交流がある。就職活動においても，大学生活で力を入れたこととして，美術館でのワークショップを自己アピールに含めている。その効果の検証を客観的におこなうことはできないが，アルバイトやクラブ活動など，学業以外での成果ではなく，学生の本分を生かしたアピールポイントとして企業から一定の評価がなされるのではないかと期待している。

注

1　白鶴美術館やその他の博物館美術館でおこなったワークショップなどについては，機会があれば別にまとめたいと考えている。

2　この項は，公益財団法人白鶴美術館主任学芸員海原靖子氏の報告を基にしている。本来は大原ゼミとのワークショップ全体にわたる内容であったが，その中から 2014 年度後期のものだけを抜き出す形でここに示した。氏の報告も別に機会を改めて発表したいと考えている。